

Title	慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」における高大協働による取り組みとその実践例
Sub Title	"Foreign language education project to foster the competencies required in a globalized society", a high school-university collaboration designed by the Keio Research Center for Foreign Language Education
Author	縣, 由衣子(Agata, Yuiko) 境, 一三(Sakai, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.17, (2020.) ,p.127- 154
JaLC DOI	
Abstract	<p>This is a report on the "Foreign Language Education Project to Foster the Competencies Required in a Globalized Society", a 2020 project led by the Keio Research Center for Foreign Language Education to promote secondary education in foreign languages other than English.</p> <p>Participants drew up lesson plans for foreign language classes using a Backward Design methodology. Firstly, class objectives for the year and each curriculum unit were established and performance tasks designed to accomplish these objectives. Participants also discussed how to break these objectives down into the Three Competencies defined by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology's Course of Study.</p> <p>This paper analyzes how teaching practices based on these lesson plans were implemented by Korean, Spanish, Chinese, German and French instructors in secondary school classes provided to students in Kanagawa Prefecture and Tokyo.</p> <p>The analysis concluded that the execution of lessons was effective in improving students' understanding and motivation to learn. The project also highlighted aspects unique to foreign language education including awareness of the characteristics of one's own culture and mother tongue, the cultivation of metalinguistic ability, and the possibilities of multicultural education.</p>
Notes	調査・実践報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20200000-0127

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学外国語教育研究センター研究プロジェクト 「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」における 高大協働による取り組みとその実践例

縣 由衣子
境 一三

Abstract

This is a report on the “Foreign Language Education Project to Foster the Competencies Required in a Globalized Society”, a 2020 project led by the Keio Research Center for Foreign Language Education to promote secondary education in foreign languages other than English.

Participants drew up lesson plans for foreign language classes using a Backward Design methodology. Firstly, class objectives for the year and each curriculum unit were established and performance tasks designed to accomplish these objectives. Participants also discussed how to break these objectives down into the Three Competencies defined by the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology’s Course of Study.

This paper analyzes how teaching practices based on these lesson plans were implemented by Korean, Spanish, Chinese, German and French instructors in secondary school classes provided to students in Kanagawa Prefecture and Tokyo.

The analysis concluded that the execution of lessons was effective in improving students’ understanding and motivation to learn. The project also highlighted aspects unique to foreign language education including awareness of the characteristics of one’s own culture and mother tongue, the cultivation of metalinguistic ability, and the possibilities of multicultural education.

1. はじめに

慶應義塾大学外国語教育研究センターでは、令和2（2020）年度に「グローバル化に対応した外国語教育推進事業」を実施した。この研究プロジェクトは、文部科学省委託事業として行った平成29年度「外国語強化地域拠点事業」、平成30年度・令和元年度「グローバル化に対応し

た外国語教育推進事業」の基礎の上に、センターの独自事業として行ったものである。

当該プロジェクトは、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語といった、英語以外の外国語科目を設置している東京都・神奈川県の中学校・高等学校6校を研究拠点校に指定し、そこで授業を担当している教員7名を研究担当者、慶應義塾大学の教員・神奈川県高等学校教員・教育関連団体役員10名を運営指導委員として、「高大協働」の枠組で行った外国語教育の共同研究である。

研究担当者は、逆向き設計（バックワードデザイン）に基づきプロジェクトが作成した様式で、年間目標と単元目標を設定した。これらの目標を新学習指導要領で提示された「三つの資質・能力」である「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力」、「学びに向かう態度・人間性」にブレイクダウンするとともに、各単元においてパフォーマンス課題を行う1時限～3時限の研究対象授業を設定・実施した。中にはパフォーマンス課題に対してルーブリックによる評価¹が行われた授業も含まれる。また運営指導委員は、研究担当者の授業設計を検討し、「英語以外の外国語」の授業における「三つの資質・能力」の問題について分析を行うとともに、年間の指導目標及び授業計画、単元の指導目標及び授業計画、単元におけるパフォーマンス課題という三つのレイヤーが、お互いにどのように関連しているかの検証を行った。

同時に、個々の授業における活動がどのような単元目標を実現するものとして設定されるか、また、個々の単元目標の年間目標との関連付けを綿密に検討するということが行われた。また、その際には、年間目標から単元目標へ、そして個々の授業活動へと向かう具体化の思考のみならず、具体的な活動の抽象化へと向かう思考との双方向で三つのレイヤーの縦軸を行き来する思考が必要であることが確認された。

本稿では、各研究拠点校で行った授業実践について、授業を行ったクラスの概要と設定した年間目標を提示した上で、研究対象授業が含まれる単元の目標と、パフォーマンス課題を含む授業活動の内容について述べた後、授業活動・単元目標・年間目標の関連を確認し、本プロジェクトで展開した方法についてまとめを行う。なお、研究プロジェクト自体の内容については、これを記した別稿を参照されたい。

2. 各研究指定校における実践報告

本節では、研究対象校となった、7校における授業計画と授業実践について報告する。本節で報告する順に、担当教員名、担当言語、及び実施学校名を以下に記載する。

	担当教員	授業担当言語	学 校 名
2.1	池谷尚美	ドイツ語	横浜市立みなと総合高等学校
2.2	吉村創	ドイツ語	私立慶應義塾高等学校
2.3	石黒みのり	韓国・朝鮮語	東京都立青梅総合高等学校
2.4	遠藤正承	韓国・朝鮮語	神奈川県立横浜翠嵐高校定時制
2.5	Barbara BAUDE	フランス語	私立カリタス女子中学高等学校
2.6	高島理恵	スペイン語	東京都立王子総合高等学校
2.7	温悠	中国語	横浜市立みなと総合高等学校

本節で引用する各授業計画は、各担当教員が執筆してプロジェクトの資料として提供したものであり、本稿では、各教員の許諾のもと、著者が引用し分析を行う。

2.1 みなと総合高等学校、ドイツ語

横浜市立みなと総合高等学校の研究担当者の授業は科目名「ドイツ語」で開講され、2年生、3年生からなる初学者を対象に実施された。本年度の受講者は10人で、教科書は朝日出版社の『Prima plus』（A1レベル）を用いた。授業は週2コマ（1コマ50分）で、連続して実施される。

2.1.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
ドイツ語圏の同世代の生徒と交流することを想定し、ドイツ語やドイツ語圏の文化に関心を深め、相手の文化と自分の文化をお互いに紹介するような活動を通じ、自己紹介・趣味・自分の一日について話題にすることができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
ドイツ語の音声、語彙、文法、言語の働き等を、母語や既習言語の知識を援用しながら理解する。	相手と自分の関係や、相手の文化的な背景に配慮しつつ、コミュニケーションを円滑に進めるために、4技能のスキルを場面に応じて適切に運用することができる。 相手の考えを理解し、自分の考えを様々な手段を使いながら伝えることができる。	相手と積極的に関係を構築するために、自ら発信し、積極的にコミュニケーションを取ろうとする態度を養う。 ドイツ語圏の文化を、自文化を比較しながら理解を深めることと同時に、自文化や固定観念についても内省することができる。

2.1.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は4つの単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、3単元目にあたる。単元名は、「私の一日」であり、10月～11月の間、15時間をかけて実施された。

この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
ドイツ語圏の同世代の生徒と交流することを想定し、自分の数年後の生活（大学生活や専門学校での生活）を思い描いて自分の一日や一週間について語るができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
数字の表し方、専攻についての言い方、一日の流れについての言い方、活動についての言い方。	数年後の自分の生活について想像する力。目的に応じて必要な情報を収集し、表現する内容を判断する能力。既習事項やビジュアルエイドを活用しながら、伝えたい事柄を工夫して構成・表現する能力。	自立的・主体的に外国語を用いて、相手に伝えようとする態度。ドイツ語圏の同世代の進路について理解し、相手の文化背景を考える力。情報や考えを伝えようとする態度。目標言語の学習を通じて、積極的に周囲の人を尊重しながら関わり、相互理解を深めようとする態度。

2.1.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の14、15時限目にあたり、この授業でパフォーマンス課題が実施された。パフォーマンス課題のテーマは、「あなたは2～3年後、何をしていますか？ 何になりたいと思っていますか？ 何を大学、専門学校で勉強して、どこで学んでいますか？ その時の一日や一週間をプレゼンしてください」とし、生徒は数年後の将来における自分の生活についてスライドを用いたプレゼンテーションを行った。

このパフォーマンス課題では、a. 表現の豊かさ、b. 音声、c. 発表態度、d. スライド、e. 質疑応答の5つの項目についての4段階でのルーブリックを用いて自己評価、及びピア評価の形で評価を行った。

その際、これらのパフォーマンス課題の実践及び、評価は、研究対象授業における次の三つの活動を通して実施された。

- ① 自分の数年後の生活について語る：発表と質疑応答
- ② ゲストからコメント：ゲストのコメントを聴く（ゲストは自身の、または担当している言語圏での学生事情を話す。）
- ③ 評価と振り返り：ルーブリック（自己評価・ピア評価）・アンケート記入

2.1.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下である。授業内の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、 、、 でマークした。また、この授業に関しては、単元目標だけでなく、単元目標から派生する三つの資質・能力と授業活動を関連づけることが図られたため、単元目標だけではなく、三つの資質・能力についても対応関係を記載する。

単元目標		
ドイツ語圏の同世代の生徒と交流することを想定し、 自分の数年後の生活（大学生活や専門学校での生活） を思い描いて 自分の一日や一週間について語る ことができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
数字の表し方、専攻についての言い方、一日の流れについての言い方、活動についての言い方。	数年後の自分の生活について 想像する力 。目的に応じて 必要な情報を収集し、表現する内容を判断する 能力。既習事項やビジュアルエイドを活用しながら、 伝えたい事柄を工夫して構成・表現する 能力。	自律的・主体的に外国語を用いて、相手に伝えようとする態度。 ドイツ語圏の同世代の進路について理解し、相手の文化背景を考える力。情報や考えを伝えようとする態度。目標言語の学習を通じて、積極的に 周囲の人を尊重しながら関わり、相互理解を深めようとする 態度。

授業活動
① 自分の 数年後の生活について語る ：発表と質疑応答 ② ゲストからコメント： ゲストのコメントを聴く （ゲストは自身の、または担当している言語圏での学生事情を話す。） ③ 評価と振り返り： ループリック（自己評価・ピア評価） ・アンケート記入

これらの年間目標、単元目標との関連付けを行いながら、パフォーマンス課題及び授業活動を行った結果、研究対象授業後に生徒を対象に行ったアンケートからは、「発表への達成感が得られた」、「ドイツ語学習への意欲が向上した」などの感想が得られた。教員の観察によれば、生徒は、授業での活動を通し、自分の発表を相手に伝え、お互いに関心を持って発表を聞く態度が身についた、と言える。課題としては、文章作成や質疑応答のサポートが不十分であった。自文化、異文化に対する内省の機会（ステレオタイプから脱して、個別性、多様性に導いていくため）をさらに注意深く持つことも必要だと考えられる。

2.2 慶應義塾高等学校、ドイツ語

私立慶應義塾高等学校では、第2学年より第二外国語の学習がはじまる。本年度の第2学年ドイツ語授業「ドイツ語Ⅰ」の受講者は一クラス25人程度からなる2クラスで、教科書は三修社の『スタート！1』（A1レベル）を用いた。授業は週2コマ（1コマ50分）実施された。

2.2.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
<p>自己紹介、趣味や住まい、一日の行動や食、買い物や家族など、身近な状況や場面においてドイツ語で表現し理解できるようになる。</p> <p>ドイツ語ということばの世界に触れることにより、異なる文化・考え方を理解し受け入れ、自分の文化・考え方を客観的にみる能力を身につける。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>以下の12の状況や場面においてドイツ語で表現し理解することができる。</p> <ol style="list-style-type: none"> 挨拶や別れ お礼やお詫び 健康状態 自分のこと：職業、住居、好き嫌いなど自己紹介 他人のこと：他人の紹介 周りにあるものごと 数に関すること：年齢、電話番号、時刻、年月日、量、価格 飲食店やお店における対応 繰り返し言ってもらう 物をとってもらう 指示にしたがう 個人的な経験、出来事、活動 	<ol style="list-style-type: none"> ことばを使用する場面や状況、相手の文化背景や特性などに応じて、単に読解や聴解をするのではなく伝達内容を受け取ろうという態度で理解し、また伝えたい内容が伝わるよう工夫して表現することができる。 ドイツ語力が足りなかったり、分からないことがあっても、臆したりあきらめたりせず、言語以外の伝達方法を利用したり話し相手と協力したりするなどあらゆる手段を駆使して、相手の伝達意図をとらえ、自分の意図を相手に伝えようとするすることができる。 	<ol style="list-style-type: none"> 何らかの問題を解決するときに、獲得したドイツ語能力を使用することを選択肢の一つとして自分に認め、必要ならば積極的にドイツ語を使うことができる。 ドイツ語を使う自分を肯定的に受け止めることができる。 自分の文化とは異なる文化に触れ、自分とは異なる言語を話す人々と交流しようとする姿勢をとることができる。

2.2.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は9つの単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、6単元目にあたる。単元名

は「食事」であり、10月～11月の間、6コマをかけて実施された。

この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
食についてドイツ語で表現し理解できるようになる。 ・ 普段の食事について表現する ・ カフェでやりとりする ・ ドイツの食文化について理解する		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
年間目標であげた状況や場面のうち、次の2つにおいてドイツ語で表現し理解することができる。 6. 周りにあるものごと 8. 飲食店における対応	年間目標と同様。	年間目標と同様。

2.2.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の5時限目にあたり、この授業でパフォーマンス課題の準備が行われた。パフォーマンス課題のテーマは「カフェでの会話」とし、生徒には教科書の語句や表現を応用して、カフェでの会話を実践し、教員が扮するウェーターを相手に、客の立場で、注文から支払いまでドイツ語で対応することが課題として設定された。また、教員によって設けられたハプニング的な状況にも対応することが求められた。

このパフォーマンス課題では、a. 語句の発音・文の抑揚、b. 語句や表現の使用、c. 流暢さ、d. 予測できない場面における対応力の4つの項目についての4段階でのルーブリックを用いて自己評価を行った。

その際、これらのパフォーマンス課題の準備は、研究対象授業における次の2つの活動を通して実施された。

- ① グループでカフェでの会話を演じる
→教科書の会話文を参照する
→他のグループが良いところと改善点についてコメントする
- ② カフェでの会話において予測できない場面での対処法を考える
→起こり得る出来事、ハプニングをグループで話し合い、クラス全体に発表して対処法を考える

2.2.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下である。授業内の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、 、 でマークした。また、この授業に関しては、単元目標だけでなく、単元目標から派生する「思考力・判断力・表現力」と授業活動を関連づけることが図られたため、単元目標だけではなく、「思考力・判断力・表現力」についても対応関係を記載する。

単元目標		
食についてドイツ語で表現し理解できるようになる。 ・ 普通の食事について表現する ・ カフェでやり取りする ・ ドイツの食文化について理解する		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
省略	1. 普通の食事について表現する、カフェでやり取りする、ドイツの食文化について理解する、といった状況において、年間目標であげたことができる。 2. ドイツ語力が足りなかったり、分からないことがあっても、臆したりあきらめたりせず、言語以外の伝達方法を利用したり話し相手と協力したりするなど あらゆる手段を駆使して、相手の伝達意図をとらえ、自分の意図を相手に伝えようとする ことができる。	省略

授業活動
① グループでカフェでの会話を演じる →教科書の会話文を参照する →他のグループが良いところと改善点についてコメントする ② カフェでの会話において予測できない場面での対処法を考える →起こり得る出来事、ハプニングをグループで話し合い、クラス全体に発表して対処法を考える

これらの年間目標、単元目標との関連付けを行いながら、パフォーマンス課題及び授業活動を行った結果、単元目標について、基本的なことは多くの生徒が達成できたと思われる。ドイツ語を使ううえでうまくいかないことがあってもあきらめない態度についても、ループリックによる自己評価及び生徒に対して行ったアンケートから判断すると、ある程度意識してもらうことができたように思われる。今後の課題として、文化学習についてはディスカッションなどを通じた学習が重要だと考えられるが、語学学習における文化学習とは何かの検討がさらに必要である。

2.3 青梅総合高等学校、韓国・朝鮮語

東京都立青梅総合高等学校の研究担当者の授業は「ハンゲル」の科目名で開講され、2年生、3年生の初学者を対象としている。本年度の受講者は一クラス23人からなり、教科書は白水社の『最新チャレンジ！韓国語』（A1レベル）を用いた。授業は週1コマ（1コマ50分）実施された。

2.3.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
自分の身近にいる韓国の方との交流を通じて、韓国や韓国語に関心を持ち、日本語との違いや共通点を見つけることができる。 学習した文法や語彙を積極的に利用し、自分の住んでいる地域や学校を相手に紹介したり、やりとりをすることができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
自分の身の回りのことを韓国語で理解し、説明したり紹介したりすることができるようになる中で、特に日本語との近似性を知識・技能に活かす。例「～が何ですか／どこですか？」（疑問詞）という文では、日本語では「～は」を使用するが、韓国語では使用しない等、似ているが違う点を周知し、日本語をあらためて見直す機会とする。	学習した文法及び語彙を積極的に使用し、自ら表現（発信）することができる。（学習したことを前提に）簡単な表現は聞き取ることができる。見る人、聞く人（対象者）が何を知りたいのか（ニーズ）、あるいは適切な場面、状況を想定した上で、適切な表現を選び、文を作成することができる。韓国語学習を日本語のメタ言語的な能力の育成に役立てることができるようになる。	韓国語に関心を持つことができる。学習した表現や文法、単語を通して日本語（母語）との共通点や違いを見つけ、自分の通っている学校や地域についてあらためて考える機会とし、自分の周辺の魅力を再発見する。また、言葉の背景にある韓国文化や社会への理解を深める。そして母語、韓国語を問わず、言語を話し、また学ぶとはどのようなことか、ということを考えることができるようになる。

2.3.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は4つの単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、3単元目にあたる。単元名は、「青梅総合高校を紹介しよう」であり、11月～1月の間、12コマをかけて実施された。

この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
韓国や韓国語に関心を持ち、日本語との違いや共通点を見つけることができる。 学習した文法や語彙を積極的に利用し、自分の学校を相手に紹介したり、クラス全体でやりとりをすることができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
学習した文法及び語彙を積極的に使用し、自ら表現（発信）することができる。 見る人、聞く人（対象者）が何を知りたいのか（ニーズ）、あるいは適切な場面、状況を想定した上で、適切な表現を選び、文を作成することができる。	自分の身の回りのことを韓国語で理解し、説明したり紹介したりすることができるようになる 中で、似ているが違う点を認知する。	自分の通っている学校についてあらためて考える機会とし、自分の周辺の魅力を再発見する。 また、言葉の背景にある韓国文化や社会への理解を深める。

2.3.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の11、12時限目にあたり、この授業でパフォーマンス課題が実施された。パフォーマンス課題のテーマは、「青梅総合高校を紹介しよう」とし、生徒には協定校である釜山外大の学生との交流を想定し、動画（オンデマンド）で自分が通っている学校を、グループで5分以内で韓国語で紹介することが求められた。動画を全体で共有後、クラス全体で韓国語での質問のやりとりが行われた。

その際、これらのパフォーマンス課題の実践は、研究対象授業における次の4つの活動を通して実施された。

- ① 動画「青梅総合高校を紹介しよう」を2回見て、感想をワークシートに記入する（個人作業）
- ② 教員作成のメモを参考にしながら他グループの発表への質問を考え、代表が板書する（グループ作業）
- ③ 自分のグループに出された質問の回答をメモを参考にしながら考え、代表が板書する（グループ作業）
- ④ グループ代表が板書の質問、回答を読み上げて共有する。その際、教員が日本語と韓国語の相違点など補足説明する

2.3.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下である。授業内の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、 、、 でマークした。

単元目標
韓国や韓国語に関心を持ち、 日本語との違いや共通点を見つけることができる。
学習した文法や語彙を積極的に利用し、 自分の学校を相手に紹介したり、 クラス全体でやりとりをすることができる。

授業活動
① 動画「青梅総合高校を紹介しよう」を 2回見て、感想をワークシートに記入する （個人作業）
② 教員作成のメモを参考にしながら他グループの発表への質問を考え、 代表が板書する（グループ作業）
③ 自分のグループに出された質問の回答を メモを参考にしながら考え、 代表が板書する（グループ作業）
④ グループ代表が板書の質問、回答を読み上げて共有する。その際、 教員が日本語と韓国語の相違点など補足説明する

生徒の感想から考察すると、学習した文法や語彙を積極的に利用しⁱⁱ、クラス全体でやりとりするという年間目標が達成された実感がある。個別の授業活動を年間の授業計画の中に位置づけながら設定したことで、年間目標を意識し、年間目標を達成するために授業で何をすべきかを考えることができ、無駄を省くことができた。さらに、学生を評価するための期末試験を、パフォーマンス課題のためのインプットとして位置付け、その内容を実際にパフォーマンス課題でアウトプットさせるという流れができた。

2.4 横浜翠嵐高等学校定時制、韓国・朝鮮語

神奈川県立横浜翠嵐高校定時制の研究担当者の授業は、「韓国朝鮮語Ⅰ」の科目名で開講された2～4年生の初学者を対象とした自由選択科目である。本年度の受講者は一クラス13人（うち6名は日本語を母語としない）からなり、教科書は白帝社の『高校生のための韓国朝鮮語 新・好きやねんハングルⅠ』（A1レベル）を用いた。授業は週2コマ（1コマ45分）で実施された。

2.4.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
<p>授業を通して韓国語や韓国文化に関心を深めることができるようにする。</p> <p>自己紹介、買い物、食事、趣味等身近な場面において、同年代の韓国語母語話者と一言でもよいので韓国語でやりとりできるようにする。</p> <p>韓国語にとどまらず、自身の母語や方言、日本語にも関心を持てるようにする。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>韓国語の発音に慣れ、定型文やよく使うフレーズを覚える。</p> <p>グループ語（スポーツ名、料理名、趣味名、果物名、野菜名、動植物名等）や身近な語等、使える語彙を増やせるようにする。</p> <p>漢字語数詞、固有語数詞に慣れ、使用する。</p>	<p>相手が何を表現しているのか、何を言いたいのか理解し、一言二言でもよいので自らも発信できるようにする。</p> <p>日本語とは異なる韓国語独特の語彙、意味、文法等に気づき使えるようにする。</p> <p>以下例示。</p> <p>a. 助詞の使い方（…日韓共通のもの、相違するもの。</p> <p>b. 「ある／いる、ない／いない」の日本語と韓国語の違い等</p>	<p>日本語や自分の母語・方言と比較対照しながら、韓国語との共通点や違いについて考察を深めることができる。</p> <p>以下例示。</p> <p>a. 日韓の漢字文化のあり方について考えることができる。</p> <p>例 漢字（漢字語）を用いるが日韓で意味が異なる語。</p> <p>b. 言語の背景にある文化や社会のあり方について考えることができる。</p> <p>例1：日韓の敬語の違い</p> <p>例2：歴史的事象との関連</p> <p>例3：文化的共通点</p>

2.4.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は7つの単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、6単元目にあたる。単元名は、「ルーツの国、地方の言語を紹介しよう。」であり、11月～12月の間、5コマ（1コマ45分）をかけて実施された。

この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
(1) 生徒自ら課題「ルーツの言語・方言を紹介しよう」ととりくみ、既習の文法項目や定型文、語彙を使いながら文を作ることができる。 (2) 大きな声やジェスチャー、絵や写真等視覚に訴えるものを使用し、他の生徒にわかるよう発表することができる。 (3) 他の生徒の発表内容を聞き、理解することができるようにする。 (4) 韓国語や日本語のほか、これら以外の言語や方言について関心を拡大することができるようにする。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
韓国語の発音に慣れ、始めと終わりの挨拶、定型文やよく使うフレーズを覚える。 「타갈로그어 タガログ語」「중국어 中国語」「한국어 韓国語」「영어 英語」等の言語名称や自分が選んだ語を韓国語で正しく発音することができる。	相手が何を表現しているのか、何を言いたいのか理解し、一言でもよいので自ら発信できるようにする。 「○○は韓国語で何といいますか」「○○とといいます」等のやりとりを適切に言えるようになる。	韓国語と日本語の文法が似ていること、似つつも異なる点があることに気づく。 漢字語の音声が日本語と韓国語で似ているもの、そうではないものに気づく。

2.4.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の5時限目にあたり、この授業でパフォーマンス課題が実施された。パフォーマンス課題のテーマは、「ルーツの言語・方言を紹介しよう」とし、生徒には各自好きなことば、フレーズについて3個選び、二人一組でルーツの言語(方言)、韓国語、日本語の意味を短文のやりとり形式で紹介することが求められた。

このパフォーマンス課題では、a. 聴衆に伝わったかどうか、b. 流暢さ、c. 明晰さ、d. 内容のわかりやすさ、f. 課題を通じて関心が拡大したかどうか、e. 自分の発表内容を理解できていたかどうかの6つの項目についての生徒は4段階でのルーブリックを用いて他者の発表に対する評価を行った。生徒は概ね他者の発表を興味深く受け止めの確に評価していた。

その際、これらのパフォーマンス課題の実践は、研究対象授業における次の6つの活動を通して実施された。

- ① 挨拶
- ② 発表のやりとりに含まれる既習事項の発声練習
- ③ 各ペアごとに紹介対話の練習
- ④ 対象の語が書かれたボードを指しながら、紹介対話の発表
- ⑤ 発表について日本語との関わりを質問
- ⑥ 発表内容をワークシートに記録する

2.4.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下である。授業内の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、 、、でマークした。

単元目標
(1) 生徒自ら課題「ルーツの言語・方言を紹介しよう」にとりくみ、 既習の文法項目や定型文、語彙を使いながら文を作る ことができる。
(2) 大きな声やジェスチャー、絵や写真等視覚に訴えるものを使用し、他の生徒にわかるよう発表 することができる。
(3) 他の生徒の発表内容を聞き、理解する ことができるようにする。
(4) 韓国語や日本語のほか、 これら以外の言語や方言について関心を拡大 することができるようにする。

授業活動
① 挨拶
② 発表のやりとり に含まれる既習事項の 発声練習
③ 各ペアごとに紹介対話の練習
④ 対象の語が書かれたボードを指しながら、紹介対話の発表
⑤ 発表について日本語との関わりを質問
⑥ 発表内容を ワークシートに記録する

授業を通じて、生徒に対しては既習の文法事項をダイアログに盛り込み、効果的に習得できるよう工夫した。発表において生徒は、通常の授業よりも大きな声を出し、聴者にも理解しやすいよう対応していた。

生徒は、調べ学習や発表を通じて、母語や方言等、普段目を向けることがないことを意識し考えるようになったように思われる。調べ学習においてはスマートフォンを利用させたが、取り上げる語の選択、その韓国語訳においては、より丁寧な指導が必要であることが確認された。また、声を出したり、発表することを特に苦手とする生徒への配慮が必要であるとの報告がなされた。

2.5 カリタス女子中学高等学校、フランス語

私立カリタス女子中学高等学校の研究担当者の授業は、科目名「フランス語」で開講され、中学3年生の既習者を対象としている。本年度の受講者は1クラス19人からなり、教科書はHachette社の『Adosphère 1』(A1レベル)を用いた。授業は週2回(1コマ45分)実施され、そのうちの一回を担当教員が行った。

2.5.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
<p>自分を取り巻く社会問題や世界について関心を持ち、相手と共有し、提案を伝えることができる。外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>DELF A1～A2レベルに必要な文法力、語彙、表現力。インプットの多い授業を行い、身近な話題や活動について話し合いが自然な発音とイントネーションでできることを目標としている。複言語を使っていくことで、英語や日本語との言語能力の意識を高める。</p>	<p>① 紹介したい内容をどのように表現すれば相手にわかりやすく伝わるかを判断する。</p> <p>② 思考力を働かせて、相手を納得させる表現や語彙を使う。また、シチュエーションに合うフランス語(tu/vous, 丁寧語など)を選び、なるべく自然な話し方を目指す。</p> <p>③ 英語で学んだ単語をフランス語と比較して、使えるものを探せる。</p> <p>④ 発表を聞きながらメモを取り、質問を準備する練習をして、アクティブな参加を意識する。</p>	<p>敬語表現とタメ語の言葉選びの他に、文化的な違いによりフランス語の場合使う表現が日本語と直訳ではないことを理解し、辞書で調べて、例文をみて、適切な言葉を選び、話し言葉なのか、書き言葉なのかを判断する。難しく発音ができない言葉は会話で使わず、相手と場面によつて適切な言葉選びを行うことができる。</p>

2.5.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は7の単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、5単元目にあたる。単元名は、「絶滅危惧種を救うために何ができるか」であり、9～11月の間、8コマをかけて実施された。この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
情報を取捨選択し、わかりやすく説明し、相手を納得させるような表現を述べて、その場で簡単な質疑応答ができる。		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
今まで習ったフランス語を生かして、今回のテーマに選ばれた語彙も加えて論理的な文章を作成し、プレゼンテーションをする。 Quel + 名詞 (質問するための疑問文) 動物に関連する単語や動詞 (Vocabulaire des animaux, Verbes d'action (sauter, grimper, escalader, nager...)) 形容詞 Adjectifs descriptifs (grand, gros...) 現在形 Présent 命令法 Impératif	① 紹介したい内容をどのように表現すれば相手にわかりやすく伝わるかを判断する。 ② 更に、思考力を働かせて、相手を納得させる表現が語彙を使う。また、シチュエーションに合うフランス語 (tu/vous, 丁寧語など) を選び、なるべく自然な話し方を目指す。 ③ 英語で学んだ単語をフランス語と比較して、使えるものを探せる機知。 ④ 発表を聞きながらメモを取り、質問を準備する練習をして、アクティブな参加を意識する。	① フランス語で発表を行うことで、堂々と発表する態度 ② クラスメイトとの協働作業を通じて、互いに学び合う意識 ③ フランス語を自分のツールにし、問題解決のために使う ④ 実際に行動し、解決策を提案する力。生徒同士で互いに学ぶ姿勢。

2.5.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の8、9時限目にあたり、この授業でパフォーマンス課題が実施された。パフォーマンス課題のテーマは、「絶滅危惧種を救うために何ができるか」とし、生徒にはGoogle スライド作成、ポスター作成、会話の形をしたプレゼンをパフォーマンスすることが求められた。

このパフォーマンス課題では、a. 言語的側面、b. パフォーマンス時の発音、イントネーション、c. メンバー間のコミュニケーション、d. 質疑応答の対応力、e. ビジュアルエイドの見やすさ、の5つの項目について4段階で、ルーブリックを用いて教員が評価を行った。

その際、これらのパフォーマンス課題の実践は、研究対象授業における次の5つの活動を通して実施された。

- ① 各グループが Google スライドとポスターを作成
- ② 各グループが①を用いて口頭で発表
- ③ 配布されたワークシートに各グループの評価を記入

- ④ くじを引き、当たった生徒は③を元に、前の授業で練習した質問の形を参考に発表グループに質問をする
- ⑤ 発表グループは③への回答を口頭で話す

2.5.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下のように示すことができる。授業内の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、 、、でマークした。

単元目標
情報を取捨選択し、わかりやすく説明し、 相手を納得させるような表現を述べて 、 その場で簡単な質疑応答ができる。

授業活動
① 各グループが Google スライドとポスターを作成
② 各グループが①を用いて 口頭で発表
③ 配布されたワークシートに各グループの評価を記入
④ くじを引き、当たった生徒は③を元に 発表グループに質問をする
⑤ 発表グループは③への 回答を口頭で話す

教員としては、授業で行う活動がどのような教育効果があるかを考えるようになった。その結果、ワークシートを書かせる活動を取り入れたが、そのことによって生徒は受け身ではなく積極的にパフォーマンスに取り組む姿勢が見られた。授業に関していえば、インプットと質疑応答に関する練習時間が足りず、クイズレットなどを利用して、質問をすること、答えること自体に生徒を慣れさせることができたらよかったとの報告がなされた。

2.6 王子総合高等学校、スペイン語

東京都立王子総合高等学校の研究担当者の授業は「スペイン語1」という科目名で開講され、2年生の初学者を対象に実施された選択必修科目である。本年度の受講者は一クラス29人からなり、教科書はEdelsa社の『¿Español? ¡Por supuesto! A1』（A1レベル）を用いた。授業は週一回連続2コマ（1コマ50分）で実施された。

2.6.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
<p>言語：外国を訪れた際や日本国内を旅行する外国人とスペイン語を使って簡単なやりとりができるようになることを目指す</p> <p>社会と文化：スペイン語は世界で22の国と地域で話されており、スペイン語を話す国や地域にはそれぞれ異なる文化や習慣がある。スペイン語学習を通して、日本、英語圏、スペイン語圏の相違点を知ることにより、さらなる世界の多様性について考え、グローバルな世界に対応できる力を身につける。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>言語：旅行で現地を訪れた際や日本国内を旅行する外国人とスペイン語で簡単なやりとりを行うための基礎的なスペイン語表現を学ぶ。</p> <p>社会と文化：スペイン語が話されている国について知る。</p>	<p>言語：既習事項を使用する場面や状況を的確に判断し、場面が変わっても既習事項やツール（身振りや画像）を最大限に活用して、表現・判断できる力を養う。</p> <p>社会と文化：スペイン語が話されている国々の相違点を認識し、日本と英語圏（または既知言語圏）との相違点を考え、グローバルな社会でコミュニケーションを行うために必要な異文化間意識を養う。</p>	<p>言語：スペイン語の基礎文法を習得することにより、ロマンス系言語やその他外国語を学習するために必要な言語学的な基礎知識を身につけ、さらなる外国語学習を促進する。また ICT ツールを正しく使用し、他者とコミュニケーションを円滑にとるための基礎知識を身につける。</p> <p>社会と文化：スペイン語圏の多様性を知ることにより、日本、スペイン語圏、そしてスペイン語圏を超えた世界の多様性について考える態度を養う。また言語学習が言語の裏側にある知識を身につけるきっかけとして作用し、言語・地域間における文化の違いに興味をもってコミュニケーションを行う姿勢を養う。</p>

2.6.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は5つの単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、3単元目にあたる。単元名は、「コーヒーを注文しよう」であり、9月～10月の間、13コマをかけて実施された。

この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
<p>言語：母語や所属社会が異なる他者と円滑にやりとりをするためには、言語のみならず、ツール（身振りや画像）を使用することが重要であることを知ること。</p> <p>社会と文化：スペイン語圏の多様性への気づきの第一歩になるため、日本とスペイン（語圏）における食習慣に関する相違点や世界の通貨について知ること。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>言語： 名詞の性数変化に合わせて、un/una を使用することができる。 値段を尋ねて、応えることができる。 名詞＋“por favor” 数字 1～10,000 y (and) の使い方 “para”＋名詞 “名詞 1” de “名詞 2” 社会と文化：スペイン語圏の物価や通貨を知る。</p>	<p>言語： バル・カフェでのやりとりに必要な挨拶をスペイン語で表現する。 スペイン語で感謝を伝える。 名詞の性と数を理解し、スペイン語で飲み物を注文する。 “por favor＋名詞”でメニューの注文やお会計を依頼する。 他者に外国語を伝わりやすく表現するための身振りを検討する。 社会と文化：スペイン語圏社会において、通貨や物価に違いがあることを知る。</p>	<p>スペイン語圏の文化的背景や文化的知識を身につけることにより、他者とコミュニケーションをとるためには言語能力のみならず、対話者の文化的背景を知ることでも重要である、ということを知る。 スペイン語に関してだけでなく、横断的学習を通して、教養を身につけることの重要性を自覚することにより、今後の自律的学習に向かう態度を育む。</p>

2.6.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の10～12時限目にあたり、パフォーマンス課題は13時間目に実施された。課題のテーマは、「コーヒーを注文しよう」とし、生徒には課題① スペイン語圏にあるカフェを想定した会話を行うこと、課題② 場面設定として語圏内の国を選択し、食べ物と飲み物合計7品を盛り込んだメニュー表を作成することが求められた。評価は、ルーブリックを使用して自己評価で行った。評価項目は以下の通りである。

課題①：a. 暗記・発音、b. 場面の想定の適切さ、c. 挨拶の適切さ、d. 必要要件を満たしているか、e. 男性形、女性形の使い分け

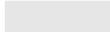
課題②：a. 綴りの正確さ、b. 通貨の単位の正確さ、c. ビジュアルエイドの適切さ、d. メニューの物品数の適切さ

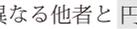
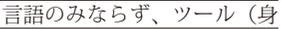
その際、これらのパフォーマンス課題の実践は、研究対象授業における次の4つの活動を通して実施された。

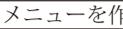
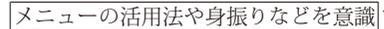
- ① メニューを作成し、スペイン語圏の違いを体感する
- ② カフェでやりとりするための枠組みとなる表現を学ぶ

- ③ 通貨を学び、日本の物価と比較する
- ④ ペアで練習し、メニューの活用法や身振りなどを意識する

2.6.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下である。授業中の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、、、、 でマークした。

単元目標
言語：母語や所属社会が異なる他者と  円滑にやりとりをするためには、  言語のみならず、ツール（身振りや画像）を使用することが重要であることを知ること。
社会と文化：  スペイン語圏の多様性への気づきの第一歩になるため、日本とスペイン（語圏）における  食習慣に関する相違点や世界の通貨を知ること。

授業活動
①  メニューを作成し、  スペイン語圏の違いを体感する
②  カフェでやりとりするための枠組みとなる表現を学ぶ
③  通貨を学び、日本の物価と比較する
④ ペアで練習し、  メニューの活用法や身振りなどを意識する

これらの目標との関連付けを行いながら、課題と授業活動を行った結果、生徒たちは、メニュー表を活用し、身振りを含めてやりとりができていた。同時に、スペイン語とその語圏により親しみを感じたというコメントもあった。授業を通しては、「スペイン語の多様性」への気づきを生徒に得させることに努めたが、一方で教員自身の習得したスペイン語の由来によって授業にバイアスがかかってしまうことも同時に確認された。

2.7 みなと総合高等学校、中国語

横浜市立みなと総合高等学校の研究担当者の授業は「中国語会話1」という科目名で、初学者を対象として開講された。本年度の受講者は一クラス13人の1年生からなり、教科書は駿河台出版社の『対話・短文で学ぶアップデート中国語』（A1レベル）を用いた。授業は週2回（1コマ50分）実施された。

2.7.1 年間目標および三つの資質・能力

年間目標とそれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のように設定した。

年間目標		
<p>国際交流の場で自己紹介・買い物・食事などについて中国の文化への関心を持ち、自文化を理解し、既習事項の中国語の音声、語彙、文法について理解を深めて文章を書く。</p> <p>学んだ範囲の中国語をどのように会話にするかを想像しつつ、場面に適した会話を苦なくすることができるようにする。状況に応じて相手とやりとりするにはどうしたらよいか考えられるようにする。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>国際交流時、学んだ中国語の音声・語彙・文法の働きを理解する力。</p> <p>例えば自己紹介・挨拶・買い物・食事の場で「是」の肯定文・否定文・「吗」の疑問文を適切に用いて相手と会話しようとする力。交流相手とのやりとりの中で中国語音声聞き取り、語彙・文法を適切に理解し、発信する力。</p>	<p>国際交流時に既習語彙や文法をどの場面で使えるか目的に応じて自ら判断する。</p> <p>交流相手の発話意図と文化的背景を汲み、発話をする力。コミュニケーションを意識し、進んで相手とやりとり（チャットやメールなど ICT や手紙、身振り手振りで）しようとする。</p>	<p>国際交流の場で自文化を意識し相手の文化（学校生活・方言・地方料理・習慣などの違い）への理解を深める。</p> <p>異文化の人と交流し、既習範囲の中国語で相手とのやりとりを通じて、相手との関係や自分の社会的な役割を模索・検討する機会とする。</p>

2.7.2 単元目標及び三つの資質・能力

本授業は3つの単元からなり、研究対象授業が含まれる単元は、3単元目にあたる。単元名は、「自己紹介をできるようにしよう」であり、10月～11月の間、8コマをかけて実施された。この単元の目標及びこれをブレイクダウンした三つの資質・能力は次のようなものである。

単元目標		
<p>交流会において、相手に質問したり、自己紹介したりする表現を身につけ、自分の身の回りのことについて軽重をつけて文章を作り、状況に応じて中国語や自分が持っているコミュニケーション力を総動員してやりとりし、自国や中国への関心を高める。</p>		
知識・技能	思考力・判断力・表現力	学びに向かう力・人間性
<p>既習単語や文法を用いて、自分の身の回りや好きなこと、名前、住んでいるところ、国籍、場所（買い物時）の表現方法含めて自己紹介をする。</p>	<p>国際交流時に既習語彙や文法を使える。</p> <p>自らを紹介して交流相手に質問したりしてやりとりをしようとする。</p> <p>既習語彙や文法を用いてメモを見ながらやりとりをする。</p>	<p>中国語で自己紹介をして中国語のやりとりの抑揚を体感し文脈に気が付く。</p> <p>自己紹介を通じて、中国文化と自文化の違いの一つでも整理できる。</p>

2.7.3 研究対象授業におけるパフォーマンス課題と授業活動

研究対象授業として設定された授業は、この単元の7、8時限目にあたり、この授業でパフォーマンス課題が実施された。パフォーマンス課題のテーマは、「自己紹介をできるようになろう」とし、生徒には文章を作成してメモをうまく活用し、交流相手と中国語で自己紹介のやりとりを行い、メモを手掛かりに、その場で自発的に文を組み立てて自己紹介をすることが求められた。

このパフォーマンス課題では、a. 発音、b. 発話、c. 聞き取り、d. 相手の顔を見られるか、e. 自己紹介ができるか、f. やりとりの6つの項目について、4段階でのルーブリックを用いて自己評価で評価を行った。

その際、これらのパフォーマンス課題の実践は、研究対象授業における次の7つの活動を通して実施された。

- ① 既習単語を使い発音練習をする
- ② 交流会時に必要な文章例を確認する
- ③ 交流会の際、コミュニケーションを取るために気をつけるべきことをホワイトボードに書き、クラスで共有する
- ④ 共有したことをもとに、改めて文章例を使って話す練習をする
- ⑤ 中国出身の高校生と受講生徒2、3人でグループを作り、準備したメモをもとにやりとりをする
- ⑥ 何度かメンバーを変えて交流する
- ⑦ 授業の振り返りを行い、考えた内容をノートに記入する。

2.7.4 活動と単元目標の連関

授業内の活動と単元目標の連関は以下である。授業中の活動によって達成される単元目標の対応箇所をそれぞれ、、、でマークした。

単元目標
交流会において、 相手に質問したり、自己紹介したりする表現を身につけ 、 自分の身の回りのことについて軽重をつけて文章を作り 、 状況に応じて中国語や自分が持っているコミュニケーション力を総動員してやりとりし、 自国や中国への関心を高める。

授業活動
① 既習単語を使い発音練習をする
② 交流会時に必要な文章例を確認する
③ 交流会の際、コミュニケーションを取るために気をつけるべきことをホワイトボードに書き、クラスで共有する
④ 共有したことをもとに、改めて文章例を使って話す練習をする
⑤ 中国出身の高校生と受講生徒2、3人でグループを作り、準備したメモをもとにやりとりをする
⑥ 何度かメンバーを変えて交流する
⑦ 授業の振り返りを行い、考えた内容をノートに記入する

授業を通じて、発音、発話、聞き取り、自己紹介、相手の顔を見る、やりとりなど、ルーブリック化した各達成目標項目に関して、教員の観察からは生徒が目標を達成できたとの実感があるのと同時に、授業時のアンケートからは生徒自身も達成できたとの感想が多く寄せられた。また、今回の授業では、中国語に限定せず、コミュニケーション一般自体がどのように成り立つのかということについて生徒に意識化させる指導を行ったことが、やり取りができたという生徒の実感につながっているように思われる。教員側の課題としては、教科書の既習範囲の文法、表現で生徒に文章を20文作成させ、それを自在に使えるように、ということを指導したにも関わらず、機械翻訳を使ってしまう生徒がいた。その点で、学習レベルにあった内容についての文章コーパスなどを事前に生徒に提示するなど、参考にできるリソースを増やすことで機械翻訳を頼らないようなアウトプットを促したいとの報告がなされた。

3. まとめ

本プロジェクトにおいて目的とされた、「逆向き設計による授業デザイン」を用いた年間の授業計画の構築及び、その目標の「三つの資質・能力」へのブレイクダウンと、個々の授業活動への関連付けは、上記のような形で実践され、「英語以外の外国語」として本プロジェクトの研究の対象となった、韓国・朝鮮語、スペイン語、中国語、ドイツ語、フランス語の5言語で適用可能であることが確認されたと言える。

そして、2020年度のプロジェクトの課題であった、年間目標、単元目標と授業内でのパフォーマンス課題を含めた個々の活動との関連付けを行った結果、次のような示唆を得ることができた。まず、生徒の理解度や学習意欲が向上するという教育効果が表れていたと考えられる点である。特に、ルーブリック評価（特に自己評価）を用いたパフォーマンス課題の実践は、評価されているポイントは何なのか（慶應高等学校・ドイツ語）、既習事項をどのように活用するのか（青梅総合高校・韓国語）、相手に伝えるためにはどのようにすれば良いのか（みな

と総合高校・中国語)などを生徒に効果的に理解させる効果を発揮しているものと思われる。

次に、授業計画を立てる教員の目線からは、例えば、青梅総合高等学校での実践例で報告されているように、年間目標を念頭において授業内活動を設定することにより、教えるべき内容が整理され無駄が減ることなどの点で効果的であったと言える。さらに重要な点として、このスキームに従って授業計画を作成することによって、プロジェクト内で、自己の授業計画と他の教員の授業計画の比較ができ、授業計画への理解が深まったという報告が多く挙げられた。前述の通り、本プロジェクトは5言語からなる多言語プロジェクトであり、この比較は異言語間で行われたものである。「英語以外の外国語」を担当する教員は中等教育においては学校内でその言語を担当する唯一の教員であることが多く、自身の授業計画や授業内容、評価について他科目の教員と相談することが難しいケースがよく見られる。そのような言語教育的状況は改善されるべきものではあるが、現状においては、本プロジェクトのスキームを用いれば多言語間での授業計画の検討が可能になることが確認できたことは、大きな成果であると考えられる。

また、実際に目標とするパフォーマンス課題の実践を生徒に可能にするためには、教員側の様々な工夫が必要なことも明らかとなった。例えば、個人でワークシートを記入し、既習事項を用いてクラス全体でのやり取りの下準備を行うこと(青梅総合高校・韓国語)や、外国語に限定されずコミュニケーションにおける相互理解とは何かを考えながら、質問事項を事前に作成すること(みなと総合高校・中国語)などの細かな工夫で生徒をガイドすることが、特に初学者を対象としたパフォーマンス課題において単元目標への到達へと生徒を導く上では、特に重要と思われる。

それと同時に、2020年度「逆向き設計の授業デザイン」で設定された年間目標、単元目標を、学習指導要領にある「三つの資質・能力」へとブレイクダウンする試みを行ったことによって、本来一般科目に向けて設定された「三つの資質・能力」の枠組みの中で、外国語教育において培うべき「思考力・判断力・表現力」及び「学びに向かう力・人間性」とは何か、ということが繰り返し問われた。その結果、王子総合高校におけるスペイン語、みなと総合高校におけるドイツ語の実践などから明らかのように、特に「学びに向かう力・人間性」においては、外国語の知識、運用を超えて、異文化の理解、そして翻って、自文化を理解する必要性の意識が喚起されることが浮かび上がってきた。

さらに、青梅総合高校の韓国語、翠嵐高校の韓国語の実践からは、第三言語としての外国語の学習を通じ、母語あるいは既習言語との類似点などを発見することで、言語をより俯瞰的に理解し、メタ言語思考を培うことができるのではないかと示唆された。特に、青梅総合高校の韓国語における実践例では、母語としての日本語と韓国語において、特に助詞における相違や類似を生徒に意識させることが試みられた。この実践を中心に、プロジェクトでは、英語をはじめとする印欧語からのアプローチだけではなく、多様なメタ言語能力養成の可

能性があることが示された。

そして、このプロジェクトにおいて、王子総合高校のスペイン語実践にも見られるように、外国語授業における複文化教育の重要性が改めて示されたことについても指摘しておきたいⁱⁱⁱ。多くの言語においては、一つの言語が必ずしも一つの国、あるいは文化に基づくものではなく、その言葉が話されている語圏内の広がりが存在し、一つの言語といっても話される地域、国によるさまざまな次元での多様なヴァリエーションが存在する。その広がりと多様性について、言語学習を通じて触れることも外国語学習における「学びに向かう力・人間力」の涵養と言えるのではないかとの議論が行われた。

2020年度は、授業計画における年間目標、単元目標、そして授業内の個々の活動の連関を図ることに重点を置いたが、この連関はあくまでも研究対象授業として設定された授業が含まれる一つの特定の単元に限定した関連付けにとどまった。従って、一つの授業科目に含まれる複数の単元の個々の目標をどのように年間目標と関連付けることができるのか、という点に関しては、その検討と実践が今後の課題として残されている^{iv}。

付. 授業内で実際に用いられたワークシート

- (1) パフォーマンス課題でのやり取りに既習事項を用いることを促すワークシート
(青梅総合高校、韓国・朝鮮語)

2021/01/03 (火) 青梅総合高等学校

年 組 番 名前：

動画を見て質問を考えよう (ヒント)

- ① 5W1H (だれが・いつ・どこで・なにを・どのように) を使おう。
韓国語では (누가, 언제, 어디서, 뭘, 어떻게) と表現します。
※テキスト P.50 にも載っています。
- ② 動画の内容にしっかり注目しよう。
クラブ活動、青総生の1日、制服、魅力、行事…
- ③ 難しく考えず、相手が答えやすい質問を考えよう。
そのためにも、習った文法や単語を使って考えよう。

-은/는 입니다 (~は~です)、예요/이에요 (~です)
-이/가 있어요/없어요 (~があります・ありません)
-이/가 뭐예요?/어디예요? (~は何ですか?・どこですか?)
좋아하는 -이/가 뭐예요? (好きな~は何ですか?)
-하나다/습니다 (かしこまった「です・ます」体)

自分たちが質問するグループ：

〈質問内容〉

自分たちが質問を受けたグループ：

〈質問内容とその答え〉

(2) スペイン語圏における複文化教育を学ぶワークシート (王子総合高校、スペイン語)

♪ スペインでお買い物 ① ♪

Nombre: _____

1. 数詞 (省略)
2. 適切な語を書きましょう。

	国名 (スペイン語)	お金の単位	単数形	複数形
スペイン	España			
アメリカ	Estados Unidos			
日本	Japón			
メキシコ	México			
ペルー	Perú			

3. ① 聞こえてくる数字を聞き取りましょう。
- ② この国のお金ですか。[] に下から選んで書きましょう。
 - 1) []
 - 2) []
 - 3) []
 - 4) []
 - 5) []

México España Perú Estados Unidos Japón

4. スペイン語圏の通貨について

	国名 (スペイン語)	お金の単位	単数形	複数形
コスタリカ				
コロンビア				
アルゼンチン				
キューバ		CUC	/	/
		CUP	/	/

参考文献

〈公文書〉

文部科学省, 2018, 『高等学校学習指導要領 (平成30年告示)』, 平成30年3月告示, https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf, (2021年3月14日閲覧確認).

〈教科書〉

Hinber, C., Poletti, M., *Adosphère 1*, Hachette, 2011.

Palominos, M., *¿Español? ¡Por supuesto! A1*, Edelsa, 2017.

金順玉・阪堂千津子, 『最新チャレンジ! 韓国語』, (白水社、2014年).

高等学校韓国朝鮮語教育ネットワーク西ブロック編集チーム, 『高校生のための韓国朝鮮語 新・好きやねんハングル I』, (白帝社、2020年).

中国語科教育法研究会編, 『対話・短文で学ぶアップデート中国語』, (駿河台出版社、2017年).

藤原三枝子他, 『スタート! 1』, (三修社、2019年).

藁谷郁美・Marco Raindl・太田達也, 『Prima plus』, (朝日出版社、2016年).

〈文献〉

ウィギンズ, G./マクタイ, J. 『理解をもたらすカリキュラム設計』 西岡加名恵訳 (日本標準、2012年).

奈須正裕 『「資質・能力」と学びのメカニズム』 (東陽館出版社、2017年).

西岡加名恵編著 『「逆向き設計」で確かな学力を保障する』 (明治図書、2008年).

西岡加名恵・田中耕治編著 『「活用する力」を育てる授業と評価』 (学事出版、2009年).

西岡加名恵 『パフォーマンス評価で生徒の「資質・能力」を育てる』 (学事出版、2017年).

注

ⁱ パフォーマンス課題とは、「さまざまな知識やスキルを総合して得られる理解の深さの程度が問われるものであるため、「できる／できない」の2区分では採点することができない」(西岡2017: 15)とされる。パフォーマンス課題の実践と評価においては、その到達目標に対する「程度」を評価する採点指針としてルーブリックが用いられる。ルーブリックとは、「成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を記した記述語からなる評価基準表」(西岡2017: 15)である。詳しくは、西岡(2008)(2017)、などを参照のこと。各授業で用いられたルーブリックについては、紙幅の関係で割愛する。

ⁱⁱ 付録の(1)を参照。

ⁱⁱⁱ 付録の(2)を参照。

^{iv} この点については、例えば西岡(2008)では、「パーツ組み立て型」「パターン繰返し型」そして「折衷型」でのパフォーマンス課題の組み立てが提示されており(西岡2008: 12)、これを複数の単元での目標設定に応用できるのではないか、ということを現在プロジェクト内で議論している。